

なごや街角今昔

【12】 星ヶ丘…大きな土地の魅力

池田 誠一

1 地下鉄がつくった街

名古屋の街の中に、地下鉄ができたことで大きく変わった地域があります。東山線の星ヶ丘や藤が丘、高畑。名城線の新瑞橋、鶴舞線の植田、原、平針など。これらの街は市の周辺部にあって、地下鉄が通る前はあまり目立つものななかった所ですが、今では賑やかな地域の拠点になっています。

しかし、なぜそこに地下鉄が計画されたのか、なぜそこが地域の拠点として成長したかを問うと、よく分からないことが出てきます。今回は、そのような街の中で最も早くスタートし、市東部の拠点に成長した星ヶ丘について考えつつ、街角を歩いてみたいと思います。(表1)

表1
名古屋市地下鉄の乗車人員、客数の多い駅
星ヶ丘は各回5〜6位をしめている

	S60	H6	H16
名古屋	15.6	17.8	16.5
栄	11.5	12.1	10.1
金山	3.3	6.5	6.3
伏見	3.9	5.3	4.9
千種	2.8	3.2	2.7
藤が丘	2.0	2.5	2.7
星ヶ丘	2.5	2.8	2.5
矢場町	1.3	2.8	2.4
市役所	2.3	2.5	2.3
久屋大通	—	2.4	2.3
今池	1.9	2.5	2.2
全線 計	87.5	118.8	114.5

(単位：万人)

2 星に一番近い所

(1) 高針街道の追分から

明治の中頃、城下の西に名古屋駅が出来てから、名古屋の街は東に向かって伸び始めました。千種から覚王山、東山公園へとメインストリートが伸び、徐々に東西の軸が形成されていきました。星ヶ丘はこの軸線上にありました。この軸線は池下、本山、東山と昔の高針街道に沿っていたといえます。星ヶ丘は、当時は追分と呼ばれ、高針街道から長久手方面への道の分岐点になっていました。

追分付近は、戦後になってもまだ寂しい所だったようで、明治初に開墾に入った井上さんの一族しか住んでいませんでした。戦前のことといえば、その中の一人が街道を通る人相手に店を出していたこと。昭和6年に東邦ガス(系列の東邦殖産)が少し長久手寄りの所に田園都市建設のための土地を購入し、始めて電気が引かれたくらいの所だったのです。

ところが、戦後その宅地予定地を愛知淑徳学園が買収しました。またその南側に住宅公園が大規模な団地を構想し、この追分付近は学園や住宅の好立地地域として注目を集めるようになりました。

(2) 激動の昭和30年代

昭和30年に追分の東の猪高町は名古屋市と合併し千種区になりました。追分付近も新し

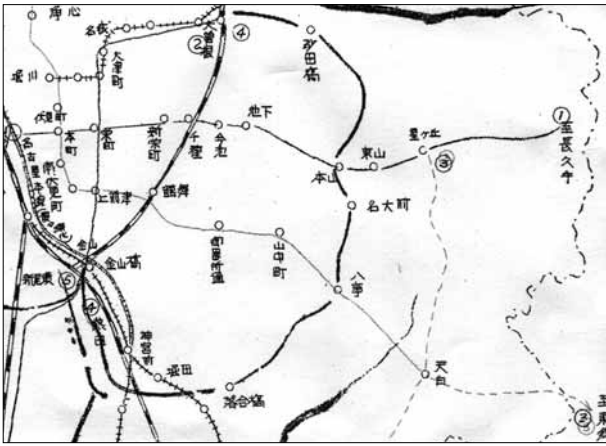


図1 都市交通審議会答申図。市東部の部分。1号線は「至長久手」とある

い都市づくりの流れの中で「星ヶ丘」と名付けられました。この名は、当時建設中だった公団住宅が「星に一番近い所」として星ヶ丘住宅とされたことに拠るといいます。

新たに学園や住宅地として注目を集め始めた星ヶ丘には、昭和34年東山公園から市電が延長されました。そして東にある高針や上社も開発の流れに巻き込まれていきましたが、とりわけその開発に大きなインパクトを与えたのが地下鉄計画でした。

昭和30年に設置された都市交通審議会は34年から35年にかけて、将来を見据えた名古屋都市圏の鉄道網の議論に入りました。そして従来の路線計画を大幅に見直し、新しい都市開発の進む名古屋東部は、1号線を長久手方

面(上社)に伸ばすよう提言したのです。(図1) 同時に構想中だった東海道幹線自動車道(東名高速道路)も上社の東で名古屋と結ばれることになりました。そしてそれと呼応したように、35年頃から星ヶ丘の東から今の藤が丘にかけての区画整理構想が動き出したのです。

星ヶ丘には、34年に淑徳学園、35年に東山工業高校、37年に相山女学園と菊里高校と相次いで移転し、学園の街になっていきました。

(3) 星ヶ丘の発展

昭和36年に池下まで開通した地下鉄は、38年には東山公園に。42年には星ヶ丘に伸びました。星ヶ丘の駅にはバスターミナルが設けられ、西山や高針方面にも駅勢圏を広げることができました。44年に地下鉄は藤が丘まで伸びましたが、星ヶ丘はその沿線をも勢力圏に取り込んでしまったのです。

その後、49年に名古屋の郊外部では初めてのデパート、オリエンタル中村(後に三越)が開業しました。公団を初めとするデベロッパーも周辺に大きな団地等を開発し、星ヶ丘は名古屋東部最大の拠点へと発展したのです。

3 変遷の跡を追って

星ヶ丘の変遷の跡を追って街角を歩いてみます。(図2) 地下鉄の東山公園駅の2番出口を出ます。前の幹線道路(東山通)は昔の高針街道で、東に上る坂はその先の新池の堤防への道です。少し行くと歩道に「ことわりの松」の史跡があります。昔、この地方の祭りの「馬の頭」に使う飾りを盗まれたお詫び

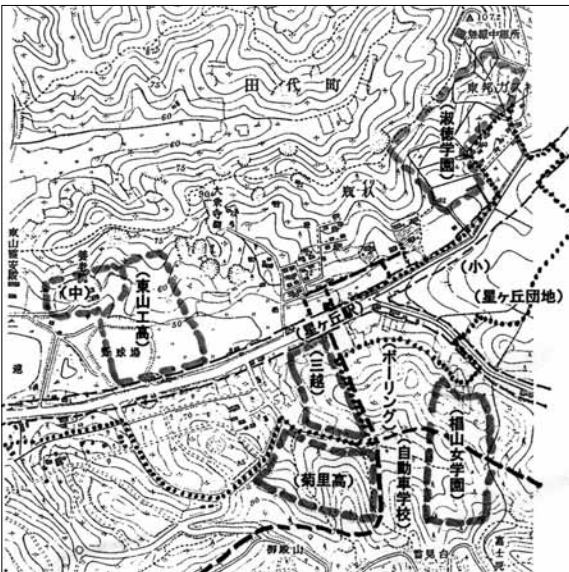


図2 昭和28年の地図の星ヶ丘付近。現在の道路、施設を追加。(--- 線とカッコは現在。点線はルート。文献①)



ことわりの松の史跡

(ことわり)にと街道沿いに植えられた4本の松がありました。最近になって、その最後の1本が枯れた後に新しい4本の松が植えられ、案内が付けられました。少し上った信号交差点が堤防で、街道はそこで大通りから外れて右に、今の東山公園の北門に行く道でした。そこは池が大きく張り出していたのです。新池は元は大きな池で、堤の高さが10m近くあり、面積も今の数倍ありました。スポーツセンターや工業高校等の土地もその一部を埋め立てて出来たものです。

道は公園の入口を過ぎ、昼なお暗い坂を上ります。この辺りのイメージが戦後の星ヶ丘だったのでしょか。千種図書館を過ぎて始めての十字路を右に曲ります。坂を上ると道は左にカーブし、右側には菊里高校の運動場が見えてきます。その右上は御殿山と呼ばれ、江戸時代にお狩場がありました。急な坂を下りて下の道を右に曲ります。道を進むと左にデパートの駐車場が現れ、信号交差点に出ます。

ここは、星ヶ丘西の開発の十字路です。西北に菊里高校、西南に三越デパートがあり、東北にはボーリング場、東南には自動車学校があって、その向こうには椋山女学園大学の建物が並んでいます。昭和30年代の中頃のこの付近の開発が、星ヶ丘のその後のイメージをつくったといえそうです。

交差点を北に曲ると道の両側に、最近できた星ヶ丘テラスのショッピング街が展開します。若い女性の行き交う街を抜け、その外れの道を右に入ります。裏道を上り、道なりに左にカーブすると、坂を下って幹線道路(西山本通)に飛び出します。ここは左下の追分から右に坂を上ってきた高針街道の峠になっており、**野越峠**と呼ばれた高針と名古屋方との境でした。

正面の高層ビルを見つつ、左手の信号を渡りまっすぐ公園の団地の中に入ります。ここの公園住宅が**星ヶ丘団地**と名付けられて「星ヶ丘」の地



東山公園北口付近の道

名になりました。団地内の道をすぐ右に曲ります。昭和30年代に建てられた建物は更新され高層化してゆったりした空間になりました。道なりに進み、団地を出て突き当たりを左に行く小さな公園を過ぎます。その先で道は急な階段を下り、幹線道路(東山通)に飛び出します。階段からは正面に淑徳学園の建物が北側の斜面を埋め尽くしているように見えます。右手の信号で幹線道路を渡ります。渡った所の歩道を見ると少し北に広がっています。これは**旧道の跡**で、ここから東にカーブして道路の反対側で分岐している旧道につながっていました。

歩道を西に行き1本目を北に入ります。この辺りから先は、戦前に東邦ガスが15m近くを理想的な**田園都市**をつくるため開発を始めた所です。昭和28年の地図には分譲地の区画が一部できているのが分かります。突き当たりはその土地を買収した**淑徳学園**です。左に曲ると右側には学校の校舎群が続きます。L字に曲ると再び東山通に出ます。学園はそ



平成15年にできた星ヶ丘テラス。若い女性に人気



菊里高校グラウンドの右の御殿山



公園の高層棟と野越峠

東邦ガスが開発した宅地と淑徳学園



「追分」の交差点。右が高針方面、左が上社方面

の西側に大学を拡張し専用の入口も出来ました。

西に進むと星ヶ丘の交差点、追分といわれた三差路に出ます。その手前、郵便局の角を北に少し行くと右手に祠があります。追分のお地藏様が今ここで街の変遷を見つめているようです。そこから西の一角が当時、井上さんだけが住んでいて付いたという井上町です。東山通に戻り、西に進むとバスターミナルになります。地下鉄に付随した名古屋で初めての郊外型バスターミナルで、駅の勢力圏を広げること大きな貢献をしました。道路の反対側の三越デパートを眺めながら、星ヶ丘駅に入ります。



静かに街を見つめる追分のお地藏さま

星ヶ丘付近は近くまで市電があるのに全く開発されていなかった開発適地でした。けれども、星ヶ丘付近にはもう一つ特徴がありました。土地の所有者が少ない、逆に言えば大きな地主があったことです。追分付近は井上さん一族でしたが、その東には東邦ガスが大きな土地を持っていました。また南側は、東山公園にかけての旧御料林が明治の頃に一人

の人に払い下げられており、星ヶ丘付近は戦後も続いていたのです。淑徳も椋山も菊里も、大きな学校用地は元々これらの持ち主の土地でした。街の開発競争では、大量輸送機関の整備と並んで、大きな集客施設の立地が決定的な意味を持ちます。一旦分割した大きな土地を元に戻すことは、不可能に近く、それだけに星ヶ丘の大きな土地の存在は貴重だったように思えます。

星ヶ丘の街角は、昭和の初めに東邦ガスが始めた宅地造成が、戦後大きな誘発効果をもたらした…といえるのかもしれませんが。

〈主な参考文献〉

- ①小林元「千種村物語」(1984、自費)
- ②「社史 東邦瓦斯株式会社」(1957、東邦瓦斯株式会社)
- ③「名古屋市及びその周辺における都市交通に関する答申」(1961)

4 街角を動かすもの

星ヶ丘の発展には学園と団地という大きな施設の立地が重要な意味を持つことになりました。戦前、市内では区画整理が進み、土地は小さな区画に細分されました。このため戦後になって、数畝を要する大きな施設を作るには開発の進んでいない郊外部に土地を求める必要がありました。

連載を終えるにあたり

街はどうして出来てきたのか。そんな素朴な疑問からこの名古屋の街角を眺めてみようとした企画でしたが、とても難しい連載になりました。それは、その街の資料が意外に少なかったためですが、それだけに私にとってはいい勉強になりました。分析が不足して中途半端だったり、思い込みすぎているところがあったかもしれませんが、お許しください。

それでもこの連載で、街づくりということの中にある意外性をいくつも発見することができました。街づくりとは関係ないようなことが、その後の街に大きな波紋を起こすことを。そんな中に「街の物語」を感じていただけたら幸いです。

池田 誠一

(次回からは、「名古屋の鎌倉街道」を連載します。)